

時代の記録と政治諷刺漫画 — 千曲市ふる里漫画館 —

小野塚 佳代

一、千曲市ふる里漫画館

二〇一九年一月一八日、長野県千曲市を訪れた。目的は千曲市ふる里漫画館、別名近藤日出造記念館だ。この漫画館へは長野駅から電車で二〇分ほど乗ったところにある、しなの鉄道屋代駅、もしくは「元篠ノ井線稲荷山駅から行くことができる。いずれの駅からも車で一〇分ほどかかる距離なので、徒歩でもいいが、タクシールか、近辺でのみ共同利用できる黄色い自転車をかう。稲荷山駅の一つ隣は姨捨(おばすて)駅で、ここでは「田毎の月」で有名な姨捨の柵田を見ることが出来る。

千曲市ふる里漫画館(以下「ふる里漫画館」)は一九九〇年に創立され、千曲市教育委員会が運営している。政治諷刺漫画を描いて一九二九年から一九七六年までのあいだ活躍した地元出身の漫画家、近藤日出造(本名は秀蔵)の功績を記念して開設された。ふる里漫画館には氏の作品原画の数々が所蔵され、その作品と遺品を中心とした展示がなされている。筆者は太平洋戦争下での漫画家の活動とその発表内容について、政治諷刺漫画家の近藤日出造が戦中に中心的な役割を担った雑誌『漫画』(漫画社)を調査してきた。今回は、戦中以外の時期の近藤の作品についても調査を行うため、この施設を訪れた。

二〇一九年現在、近藤日出造と聞いて知っている年代はどれくらいだろうか。漫画の大家としての近藤の地位が確立され、メディア露出も多忙を極めた一九六〇年前後頃の活躍を知っている世代、おそらく現在六〇代より上くらいの世代ならご存知の方が多いだろう。しかしそれより下の世代になると、知らない、というより諷刺漫画自体が現在日本ではあまりメジャーではなくなくなってきているという現状も大きい。いま、漫画といえばストーリー漫画が主流となっている。コンビニで売っている週刊や月刊漫画雑誌に連載されている長編漫画だ。しかしこうして紙媒体で毎週、毎月発行される漫画の形態も、インターネット主体の購読形態が進みそろそろ過去のものになりつつあるかもしれない。こうした急速な時代の流れの中、ふる里漫画館では近藤日出造の政治漫画

の保管、展示とともに、毎年漫画と川柳のコンクールを行うなど、地域交流と漫画文化発展のための貢献が創立以来ずっと続けられている。

二、所蔵品

ふる里漫画館には、近藤日出造の作品・資料約四千点が保管されている。貴重な作品原画のほかにも、掲載新聞・雑誌、仕事道具や手紙といった遺品、その他地元ゆかりの作家の作品や、審査員を務めた読売国際漫画大賞(二〇〇七年まで開催)受賞作品などが所蔵される。

図書館や他の漫画資料を保管する施設でも、近藤の作品が掲載された新聞、雑誌の多くを見ることが出来る。読売新聞をはじめ、それらの過去の記事を見ることが出来る。一方で近藤の作品原画をこれだけの数とまって保管しているのはふる里漫画館だけだろう。そもそも漫画というものは現代アートやいわゆる「ハイクルチャー」に比較的好く見られるような一点ものの作品を大切に保管するといった習慣に乏しい。いまでもこそ漫画原稿が展覧会に出品されたり、保管する施設が出てきたりとその扱いは大きく変化したが、本来漫画はメディアとして複製されたものを世に残し、そのために作られた原稿の保管にはそこまで労力を割かないという性格で、その量の膨大さもあって現代でもこの傾向はそれほど変わらない。近藤が上京し、弟子入りした漫画家岡本一平のもとで手伝った仕事も、岡本の作品をまとめた『一平全集』のための版づくりだった。当時岡本の原画はほとんどが離散してしまっていたため、これまでの全集を作るのに弟子が印刷発行された紙面・誌面から改めて版下を作らなければならなかったのである^①。

近藤の生家があった故郷でもあり、ふる里漫画館の所在地である千曲市稲荷山は、北国西街道(善光寺道)の整備された一六一四年ころから洗馬宿(せまじゅく)より十番目の宿場町として栄えた歴史をもつ。一八六二年の記録では街道の中で最大の宿場町として栄え、呉服問屋を中心とした商取引の町としても繁盛したとされる。こうした土地にあって、近藤の生家も白壁づくりの大きな商店だったという。ふる里漫画館の資料保管庫は、漫画館の隣に連なる白壁の土蔵だ。稲荷山一帯にこのような白壁の土蔵が並び立っており、その美しい景観がこの町の特徴である。これは一八四七年の善光寺大地震の際、火災により市

街地がほぼ全焼するという大被害を受けたことから、その教訓を生かして防火、耐火に優れた土蔵の町となったことに由来する。現在、重要伝統的建造物群保存地区でもある稲荷山は「旧街道・蔵のまち」としてかつての町の面影を現世に伝えている。

漫画館の土蔵の保管庫に入ると、外に比べて一段温度が下がってひんやりとする。中には近藤日出造にまつわる作品、資料の数々が大切に並べられる。積み重ねた白い箱の中には、更に白い封筒がいくつも入っており、ひとつひとつの封筒の中に十点ほどの原画が封入されている。一般公開されていないこの保管庫で、研究のため特別に許可を得、封筒から取り出して原画を見せて頂いた。一枚一枚の紙には、墨で描かれた線が実に自由に、生き生きとひかれていた。下書きの鉛筆の線を消した跡まではっきりとわかる。修正跡や、手で擦れた跡、スケッチブックからちぎった後に残る連続した穴あきが破れたぎざぎざも、原画でしか見ることができない。これらの作品はどれも新聞や雑誌に掲載された状態を完成形として想定し、作画されている。これは漫画作品全般に言えることで、前述したような「一点もの」に価値を置く作品とは大きく異なる点でもある。大量に複製され、多くの人々の手に渡ってはじめて価値を發揮する、漫画が大衆文化と呼ばれる所以だ。そのため、最終工程を意識して制作された作品原画からは、漫画家がどこに気を使って、どこは力を抜くのか、その作業工程がわかる。たとえば新聞に印刷される場合、細やかな明暗は印刷されない。コントラストの非常にはっきりとした最終印刷がなされるので、漫画家も作画するときには主線をはっきりと濃く描き、逆に掠れた程度の薄い鉛線の跡や、下書きのわずかな消し残し、そうしたものは最終的に写らないことを踏んだうえで作画している。現代の高性能なスキャナーではそうした表情も細やかに反映されてしまうかもしれないが、当時の場合はそうではないので、原画には作画過程のわずかな「跡」が残されたままだったりする。こうした跡は基本的に人前に出ることはないが、肉筆を感じ取られる原画にはそこにしかない魅力があるように思う。現代では漫画家をはじめ、クリエイターの作業のデジタル化が進んでいる。そろそろ絵を描くにしても紙に鉛筆で描いたことがないという世代が中心になってくるだろう。ただ時代とともに在り方が変化しても、描く工程に共感できることは多いはずだ。

三、近藤日出造の漫画

近藤日出造の代表的な仕事といえば、読売新聞の政治漫画だ。そして新聞紙面に載る政治漫画を描く上で、おそらくまず必須となる条件が、似顔が似ているということである。描かれている政治家、あるいは登場人物が誰なのか、これを絵で読ませることは最も不可欠な要素だからだ。その点近藤は早くから似顔を得意としており、似顔ならば師の岡本も凌ぐ名手と称された。近藤の描く似顔は顔が似ていることはもちろん、その人物を判別させるための顔に現れる個性を捉えて適格に表している。それは表情だったり、しわだったり、化粧だったり、仕草や服装も含まれるかもしれない。政治漫画で最も盛んに描かれる人物といえば、日本の場合は内閣総理大臣だろう。ただ社会状況によって例外があり、例えば戦時下には戦争政策によって国内の権力者の風刺を描くことはできなかった。かわりに描くよう指示されたのは敵国の首相の風刺、というよりはヘイトカートゥーンの様相の色濃いプロパガンダで、太平洋戦争中最も目立って描かれたのはフランクリン・ルーズヴェルトとウィンストン・チャーチルだった。このような平時と異なる場合を除き、基本的には長く在職した内閣総理大臣を政治漫画家は多く描く機会があると考えていいだろう。近藤は一九三三年に読売新聞の嘱託となるが一九三八年に一度退社し、一九四七年に再入社したのち脳卒中で倒れる一九七六年はじめて読売新聞紙上で政治漫画を描いた。この戦後の在職期間中に、二〇一九年の今日までで唯一、日本で第五次内閣を組



図1 「舌」近藤日出造,1953

閣した内閣総理大臣がいる。吉田茂だ。おそらく近藤が最も多く描いた政治家である。一九五三年、週刊読売に掲載された「舌」という漫画(図1)は、近藤が描いた吉田茂のなかでも比較的よく知られた漫画作品のひとつだ。一九五三年二月二八日の衆議院予算委員会、右派社会党の西村栄一の問題に対して吉田茂が「バカヤロウ」と呟いたことが、国会軽視、議員の侮辱だとして問題化した。これに端を発して野党の内閣不信任案が成立し、衆議院が解散した。この一連の「バカヤロウ解散」と呼ばれる出来事を近藤は、吉田が自らの舌によって縛られ、身動きが取れなくなっている様子として漫画に描いた。画中の舌には「暴言」という字も添えられている。

しかし近藤の描く吉田茂の漫画は、鋭い批判性を持ちながら、一方でどこか親しみの湧く風貌で描かれる。当然似ているのだから本人がそうした風貌でもあるのだが、漫画の中の「キャラクター」として親しみの湧く描かれ方をしているように見受けられる。画中の吉田は常に飛んだり跳ねたり、犬に追いかけられたり、ズボンのおしりが破けていたり、非常にユーモラスな漫画のキャラクターとしても自立しているのである。本来フランスやイギリスといったヨーロッパを発祥とする風刺、諷刺漫画の文化は、毒のある鋭い批判性が本分である。一方で、戯画、鳥羽絵(とばえ)、ポンチ絵等々これまで多種多様に変遷してきた日本の漫画の歴史の中でも、特に風刺という要素の表し方には西洋と比べて少し違いがあるように思う。日本の漫画、諷刺漫画は全体的に、風刺を含んだ作品であっても表面的にはより笑いや滑稽みを前面に出し、そこに痛烈な批判を含ませる、このようなやり方が目立つ。風刺、批判性という点で諷刺漫画の本質は保ったまま、しかしいつの時代も漫画家は読者の読み取り方、リテラシーといった傾向を意識してその伝え方を試行錯誤している。日本の大手新聞社の読者、日本の大衆がどのような漫画や表現を受け入れやすいか、近藤も試行錯誤を繰り返したはずだ。笑い風刺の塩梅を、戦争という平時と異なる社会背景で攻撃的な漫画を描き、また海外取材を行うなどの様々な過程で近藤は身に着けたのではないだろうか。

近藤が得意としたものは似顔のほかに、インタビューを活かしたルポ漫画がある。当時は漫画家が取材、編集を兼ねていたので、漫画家が現場まで取材にいったり漫画や記事にしてくるということが行われた。一九六三年から翌年にかけて近藤が読売新聞で連載した『にっぽん人物画』は、オリオン社から出版さ

れて本になつて(2)。ここには読売新聞社編集部が選んだ著名人の元へ近藤がインタビューに行き、その記録を人物画と文章でまとめて記録してある。一人目は吉田茂で、ほかにも市川団十郎、佐藤栄作、吉永小百合、長島茂雄といった時の人が並ぶ。今回の調査では海外ルポ漫画の原画を拝見した。ふる里漫画館に保管される原画は一部掲載年不詳となっているものがあり、海外ルポも時期など不明なものがある。これらの掲載先と掲載時期の特定は今後の課題としたい。「凱旋門楼上にて」と書かれた漫画では、女性が二人凱旋門の縁越しにパリの街を見下ろしている。風景の中にはエッフェル塔が佇み、そちらを向いている彼女たちの顔はこちらから見えない。得意の似顔を活かして特定の人物と分かる政治漫画を主な仕事とした近藤だが、土地の風景、風俗を描いた取材作品には名もない人々の溶け込む風景も数多くある。タイトルのない作品も多いが、これはルポ漫画に限らない。一齣漫画は挿絵的な用いられ方をする場合も多く、一点一点に必ずしも作者名やタイトルがふられているわけではない。これもタイトルのない作品で、どこかの田舎町だろうか、ドーベルマンを従えた警察官か将校が二人、あたりを見回している(図2)。手前に描かれたひとりとはどこかを注視している顔つきだが、犬と一緒に後ろにいるもうひとりとは、水平に固定されたポールにもたれかけ、どこか緊張感がないようにも見える。遠景に広がる風景がどこかで、よけいにそう見えるのかもしれない。近藤はビルや人工的な建造物の立ち並ぶ街の風景を描くときも、あまり定規を使っていない。いつもの筆のままの自然な線で、風景の中に見えるものすべてを描きこんでいる。一齣(こま)漫画というひとつの画面に収めるための、そ



図2 無題, 近藤日出造, 年代不詳

それぞれのモチーフ間の協調性、まとめ方が秀逸である。

こうした現場取材を漫画にした作品と、新聞などに掲載される政治漫画を比べてみると、その情報の厳密さにはやはり差がある。どこへ行って何を見たという情報を、ルポ漫画の場合はそれ以外のインタビュ記事や現場取材記事に付与して載せることのできる仕事が多い。一方、政治漫画は漫画家自らが編集した漫画雑誌の場合などは別として、新聞紙にその一齣だけが掲載される。漫画家はたった一齣ですべてを完結させなければならない。実際のところ、政治漫画では絵だけで政治や社会といった複雑な状況を解説することは難しい。そのため、画中に文字がふられることがよくある。例えば一九五一年読売新聞に掲載された漫画「あゝ小麦協定」(図3)。この漫画は四齣から成り、一九五四年に日本が米国に調印したM S A協定のことを表している。「米」と書かれた手が、「M」と書かれた弾薬、次に「S」と書かれた銃を吉田茂に与える。もちろん「米」はアメリカを指している。武器を背負いこんだ吉田に、最後は「A」と書かれた皿にのせられた小さなパンが与えられ、吉田はそれを食べようと大きく口を開けている。M S A協定は米国の相互安全保障法(M S A)に基づいて米国が自由主義諸国と締結した安全保障協定で、日本では日米相互防衛援助協定とも呼ばれる。これは米国が日本に対して兵器その他の援助を約束するかわりに、日本は防衛力の強化を約束したが、同時に米国への政治的経済的従属を強要されるものでもあった。米国はM S A法によって余剰農作物輸出機構を創設、一九五四年三月の日本の調印によって日本は小麦六〇万トンや大麦一一万

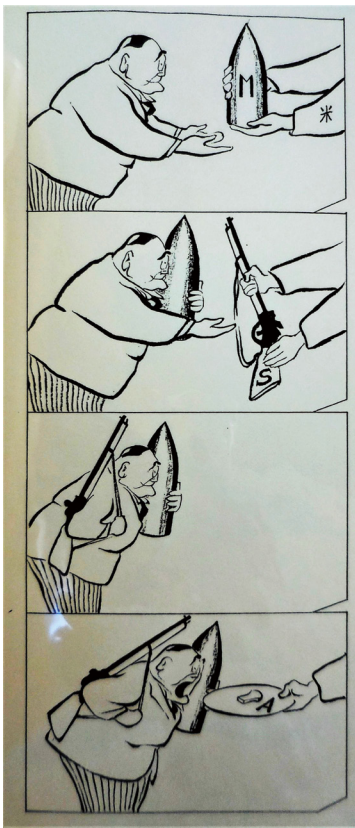


図3 「あゝ小麦協定」近藤日出造,1951

トンといった米国の余剰農作物を受け入れることとなった。このとき受け入れられた小麦を「M S A小麦」と呼び、国内では給食をはじめパン普及がなされた。漫画はこの内容を描いている。この場合使用される文字は米、M、S、Aのみだが、それが画中のどこに付されるかによって漫画の中ならではの意味合いを持つてくる。はじめに受け取った銃弾と銃によって両手の塞がった吉田が、ひな鳥のように米国から与えられるものを受け取るしかない等、漫画に描かれることで作品の読み取りには様々な解釈が可能だ。近藤の漫画の中で使用される文字は、あくまで補足的であり、一齣(時には数齣)の漫画あつてこそその文字、といった役割から逸脱することなく利用される。ほかにも政党や人物名など、絵だけでは読者に伝わらなかつたり、誤解を生む恐れのある場合に文字が最低限の情報を補充している。

近藤の仕事で有名なものは、ほとんどが前述したような戦後のものだろう。読売新聞の政治漫画を中心として、似顔を活かしたインタビュ記事、テレビや他のメディアに広く進出した。しかし戦後の漫画界は、戦中のものをほとんどそのまま引き継いだ部分が多い。戦後にはこのことに対する批判も出た。戦中、戦争政策によってルーズヴェルトやチャーチルをこき下ろす漫画を描いていたかと思えば、戦争が終わった途端に国内の権力者を批判のやり玉に挙げるその変わり身の早さが、「常に強力者の尻馬に乗」っている、といった厳しい批判にさらされた(註3)。戦中に近藤がその中心的な仕事とした媒体が雑誌「漫画」だ。この雑誌は一九四〇年十月に新日本漫画家協会の機関誌として創刊された月刊誌で、時局を映した漫画、記事、コラムは政治を中心に芸能、風俗も取り上げ、娯楽小説、落語、川柳なども掲載した。ちなみにこの頃、こども向けの漫画といえば坂本牙城の『タンクタンクロー』が『幼年倶楽部』(大日本雄弁会講談社)で一九三六年の終わりまで連載され、手塚治虫は一九四一年にやっと中学校へ入学するという頃だ。ディズニー映画に影響を受けた手塚が、一般に戦後ストーリー漫画の原点と捉えられる『新寶島』(しんたからじま)を発表するのは終戦後の一九四七年のことだ。雑誌「漫画」で中心となるのは主に一齣で描かれる諷刺漫画である。年によって掲載ページは異なるが、本誌には二ページの見開き漫画が必ず一点掲載された。一ページ全体を使った漫画も多く、次にページを四分割してそれぞれに漫画が掲載されるページや、数齣を使って物語仕立てにした漫画も掲載された。そして表紙は終戦末期の一部の時期を除き、近藤の

似顔漫画が掲載されている。近藤は一九三二年に新漫画派集団を結成、その翌年読売新聞社に入社する。そして一九四〇年に新日本漫画家協会を設立して月刊誌「漫画」の発行が始まる。この雑誌に寄稿した漫画家は近藤日出造、横山隆一、杉浦幸雄、石川進介、安本亮一、加藤悦郎、藤井図夢、池田永一治、秋好馨、塩田英二郎、堤寒三、田内正男らで、いずれも新日本漫画家協会の会員六〇名余りとなっている。雑誌「漫画」はプロパガンダ色の強い雑誌だったが、その後の漫画界で活躍する多くの漫画家を輩出したことも事実である。

戦後、近藤は既述した通り読売新聞を始め幅広く活躍を展開し、一九六四年日本漫画家協会初代理事長に就任し、一九七四年に紫綬褒章、一九七五年に菊池寛賞を受賞した。そして一九七九年に亡くなるまで、漫画の質的向上、漫画家の社会的地位向上のために尽力した。

四、千曲市ふる里漫画館の利用状況、コンクール

作品の収蔵された蔵は一般に公開されていないが、ふる里漫画館では毎年展示替えを行っており、そこで展示された作品原画を見ることが出来る。一階にはメインとなる展示室と受付、二階には展示室とマンガが読める部屋がある。ここには近所の小中学生たちがマンガを読みに来ている。大人料金三〇〇円を支払えば一日出入りすることが自由だ。マンガだけ置いてある図書館ができたのはずいぶん新しいことだと考えられがちだが、こうした場を見ると戦前の赤本、貸本屋と基本的には似たものがあるのではないかと思う。開かれた場所では娯楽の印刷物をばらばらと捲る。こうした文化自体は複製技術、流通が整って以来ずっと存在する。そしてこれが読者の基本形態であった。こうして考えると、むしろその基本形態がこの近年のメディアの発展によって、飛躍的にパーソナルなスペースへと変化しているのかもしれない。

ふる里漫画館では毎年「川柳・川柳漫画コンクール」が行われている。最後に、筆者の訪れた二〇一九年一月時点で展示してあった受賞作品の中から一部を紹介したい。川柳漫画部門、合作仲良しの入選「がつこうにとまりたいなあちこくなし」。この仲良し作品というのは、親子や、お祖父さんお祖母さんと孫といった家族が合作して応募をするという内容だ。この場合は川柳が孫、漫画が祖父となっていた。漫画では、校舎の上で布団をかぶって寝ている孫が描かれる。さらに、毎年受賞した作品を川柳漫画部門選者で、近藤日出造の弟子で

ある牧野圭一が色紙に作画して受賞者に贈呈するということを行っている。この作品を牧野が作画した漫画では、チャイムの鳴る校舎からまだ遠く離れて慌てている孫の様子が描かれる。「がつこうにとまりたいなあ」という願望が叶っている(けど寝ている)場面と、願望を思わず抱いてしまった場面という二つの漫画を展示では同時に見ることができた。川柳の受賞作では、川柳が漫画化されることで視覚的なイメージがぐっと広がる。川柳一般部門入選「ふるさととは母さんのいるだいどころ」。これを作画した牧野の漫画では、かっぱう着姿の母親が釜戸の火を竹筒で吹いている後ろで、おかつぱ頭の妹と坊主頭の兄がごはんを待っている、という場面が描かれた。ふるさとのだいどころ、と一つとっても、思い浮かべる絵は世代によって異なるだろう。絵にしてみても始めて気が付くこともたくさんある。これは、様々な時代の漫画を研究することの面白さでもある。他にも「弟はランドセルより小さなせ」、「はるいちばんせんたくものがさかあがり」、「空っぽなポケットに秘む負け惜しみ」と、かわいらしい作品からピリッと風刺を利かせた作品まで、幅広い受賞作を楽しむことができた。こうした素晴らしい企画とともに、今後もふる里漫画館が後世に引き継がれてゆくことを願う。

謝辞

調査にご協力頂いた千曲市ふる里漫画館、近藤汎氏に感謝の意を表す。

註

- (1) 峯島正行『近藤日出造の世界』青蛙房出版、一九八四年、七二頁
- (2) 近藤日出造『につぼん人物画』オリオン社、一九六四年、三頁
- (3) 加藤悦郎「所詮インテリの処世術」、「VAN」創刊号、イヴニングスター社、一九四六年五月、六頁